

『入菩提行論細疏』における所知障の覚え書き

九州大学 積見弘

1. 所知障について

大乘仏教において、仏となるためには、二種類の障がある。一つは、解脱を得るために取り除かなければならぬ障であり、煩惱障 (kleśāvaraṇa) と言われる。もう一つは仏の一切智を得るために取り除かなければならぬ障であり、所知障 (jñeyāvaraṇa) と言われる。声聞と縁覚の聖者たちは、煩惱障だけの除去を目的としているが、菩薩たちは、煩惱障の除去と所知障の除去とを目的としている。従って、「所知障」という語は、小乗に対する大乘の卓越性を示すための重要な術語となる。

ところが所知障という語は、主として唯識学派において扱われたものであった。一方、初期の中観学派の文献、たとえば『中論』においては、所知障という言葉は見出すことができない⁽¹⁾。

中期の中観学派の分派において、所知障という語に対して、帰謬論証派のチャンドラキールティ (Candrakīrti、月称、650頃) は、従来の唯識学派の理解や、唯識学派の理解に近い中観学派の自立論証派のバーヴァヴィヴェカ (Bhāvaviveka、Bhavya 500-570頃)⁽²⁾の理解と異なった理解を示している⁽³⁾。チベットのツォンカバ (Tsong kha pa 1357-1419) によれば、この所知障に対する理解の違いは、帰謬論証派の一つの特徴として考えられている⁽⁴⁾。

⁽¹⁾ 以上、仏教における所知障という語の研究には、川崎信定 「一切智思想の研究」 (春秋社 平成4年 pp. 151-154)、舟橋尚哉 「煩惱障所知障と人法二無我」 (『佛教学セミナー』第1号 1965年 pp. 52-62)、小川一乗 「所知障に関する中観的解釈」 (『空性思想の研究I』 文栄堂書店 昭和63年 pp. 33-35) などがある。

⁽²⁾ 江島恵教博士は、写本の再検討から、「Bhāviveka」と提案する。江島恵教 「Bhāvaviveka / Bhavya / Bhāviveka」 『印度學佛教學研究』 第三十八巻第二號 平成2年 pp. 838-846 参照のこと。

⁽³⁾ 光川豊芸 「人法二無我に対する清弁と月称の見解」 (『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第一集 1962年 pp. 132-135)；小川一乗前掲論文 p. 36以下；川崎信定前掲書 p. 154以下；舟橋尚哉前掲論文 pp. 62-64など参照。

⁽⁴⁾ 松本史朗 「ツォンカバの中観思想について」 (『東洋学報』 第62巻 第3・4號 pp. 193-194)、また、長尾雅人 「西藏佛教研究」 (岩波書店 1954年 pp. 350-352) 参照。但し、松本博士によれば、これはツォンカバの創案によるものか、それとも既にチャンドラキールティの著作に説かれてい

